

青年期の自己嫌悪感の様相：性差・自己肯定的感情 としての自愛心という観点より

大野，真利奈
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18462>

出版情報：九州大学心理学研究. 11, pp.213-223, 2010-03-31. Faculty of Human-Environment
Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

青年期の自己嫌悪感の様相

— 性差・自己肯定的感情としての自愛心という観点より —

大野真利奈 九州大学大学院人間環境学府

Some aspects of self-disgust in adolescence: In terms of gender difference, and self-love, which is one dimension of self-affirmation

Marina Ono (*Graduate School of Human - Environment Studies, Kyushu University*)

Self-disgust is defined as a negative feeling of oneself and is similar to loneliness and a sense of inferiority. The purpose of this study is to clarify some aspects of self-disgust in adolescence, especially in terms of gender difference, and self-love, which is one dimension of self-affirmation. Two hundred and seventy undergraduates and graduates were asked to answer a questionnaire that measures self-love, self-disgust, and other related factors of self-disgust. The results were as follows: (1) in some aspects females tended to report stronger feelings of self-disgust compared to males; (2) the more students self-affirmation was based in narcissistic tendencies, the more strongly he or she felt self-disgust; and (3) a lower level of self-disgust was associated with high self-affirmation, which is based in self-acceptance, and autonomy and future orientation. In other words, this study suggests that self-affirmation is strongly associated with a feeling of self-disgust in adolescence.

Key Words: self-disgust, gender difference, self-affirmation

問題と目的

自己嫌悪感には、“対自的自己嫌悪感”と“対他的自己嫌悪感”（佐藤，1997）が存在するといわれ，“客観的事実はどうあれ否定的な感情や事象が自分自身に由来し，自分自身を嫌だと感じること”（水間，1996）とされる。また，詫間（1978）は，程度の差はあれど，ほとんどの青年が自己嫌悪感を持つという。そして，青年期において，自己嫌悪感が特に強くあらわれる理由として，青年の抱く理想が高く，それが満たされないと失望も大きくなること，自己と他者を比較し，さらに他者より自分を劣位としてみなすことが多いこと，事実に基づいて自分自身を客観視するよりも，観念的要因によって自己嫌悪感を抱くことを挙げている。また，青年が抱く自己嫌悪感には，自己への関心の高さや，自己を見つめることの高さと関連があるといわれる（佐藤，1994）。人格形成期にある青年にとって自分を見つめ，自分を知ろうとすることは，必然的なことであると考えられるが，その過程の中で多くの青年は，自己探求に熱心であるがゆえに，自己に不満を持ち，自己に失望し，自己嫌悪感を感じていると考えられる。

青年期が始まる指標の1つとして“対自的自己意識”の発現が挙げられる（鈴木，1998）。Stratton et al（1993/1996）によれば，自己意識とは，他人も気がついていて，興味を持ち，なおかつ批判的であるという信念と組み合わせられる，自分自身の行動や感情，容貌につい

ての誇張された意識である。青年期に入ると人は，自分を客観視することができるようになる。何をするのか等を意識しつつ行動している自分を，自分自身が意識できる対自的段階に移行するのである。しかし，それは，批判的であることが多く（鈴木，1998），“青年は，自分を批判的にみる自分を常に意識せざるをえなくなる”（鈴木，1998）。水間（1996）は，青年期において，自己に対する意識は急激に高まり，激しい自己探求が行われるという。そして，青年は理想が高く，自分に関心があるために周囲と比較し，なおかつ自分についての知識が乏しいと述べている。ゆえに，“自己を知ろうとして敏感になればなるほど，自己の否定的な側面に気づき，自己に対する否定的な感情である自己嫌悪感に陥る”（水間，1996）ということも考えられる。自己に対する否定的な感情である自己嫌悪感には，“自らの生命を断つ方向に駆り立てる様な自己嫌悪”（萩野，1978）さえあるといわれ，自殺と関連があることを示唆する文献も多い（Spranger, 1924/1973; 萩野, 1978; 宇野, 1978; 佐藤・田中, 1989）。また，アルコール依存症者はアルコールが切れると自己嫌悪と罪悪感にさいなまれ，そのやるせない気持ちを振り払うために，飲酒を繰り返すという（塩山，1979）。上記のように，心理的問題との関連も示される自己嫌悪感を特に強く抱くと考えられる青年期に，自己嫌悪感がそれに発展することを防ぐということは，人格形成期にある青年の心的発達を助けると考えられる。また，青年の自己嫌悪感の様相を捉えることは，自己と

向かい合い、悩みながらも自分の理想を探求する青年への理解を深めるという観点からも有効であると考えられる。

青年期の自己嫌悪感の様相を捉える際の観点として、性差という観点が挙げられる。水間 (1996) は自己嫌悪感尺度の作成を行う際に、自己嫌悪感の性差について2回に渡る調査を行った。その結果、1回目の調査では、1項目にだけ、性差がみられた。それに対し、2回目の調査では、全21項目中12項目に性差がみられ、全項目の自己嫌悪感得点の平均値にも性差がみられた。そして、自己嫌悪感得点の平均値に有意な差があるものは全て、女子のほうが有意に得点が高いという結果となった。また、佐藤 (1997) の研究においても、高校生、大学生では、自己嫌悪感を抱く程度が男子より女子のほうが強いことが示されている。さらに、佐藤 (1999) は青年が抱く自己嫌悪感がどのような感情的な要素によって経験され、どのような発達の変化を遂げるのかについての検討を行い、大学生では自己嫌悪感の感情状態を構成する8因子中、6因子において、女子の得点が男子よりも有意に高いことを示している。以上のように、青年期の自己嫌悪感の性差に関しては、女性の方が男性よりも自己嫌悪感を抱く程度が強いことが示されている (水間, 1996; 佐藤, 1997, 1999)。しかし、これらの研究では、女性がどのような自己嫌悪感をより強く抱くのかという点については一貫した結果が得られていない。すなわち、青年期において女性はどのような自己嫌悪感を男性より強く抱くのかということを検討し、その背景について言及することは青年期の自己嫌悪感の様相をより明確に把握するために意義深いと考えられる。

落合 (1985) は青年期において自己嫌悪感に孤独感、劣等感と類似しているとする。さらに佐藤 (2001) は、自己嫌悪感に否定的な感情の中にあり、その中でも自信の無さに付随する感情と分類している。この様に否定的な側面が強調される一方、自己嫌悪感には多くの人が抱く感情であり、それを抱くことは必ずしも心理的問題を抱えることではない。自己嫌悪感を感じることは“青年に成長の原動力を与える場合もある” (佐藤・落合, 1995) といわれたり、自己嫌悪感に否定的のみならず、今より肯定的な自己を求めがゆえの自己への否定的な感情である (佐藤, 2001) ともいわれる。青年の抱く感情は、自己批判的である自己意識から抱く自己否定的な感情と、理想を高く持ち、自分ならばできると信じて自己探求を行う自己肯定的な感情という相反する2つの感情が常にせめぎあう。この2つの感情は、両極にある感情であるように思われるが、青年期において、自己否定的な感情と自己肯定的な感情は互いに連動し、影響しあうと言われる (返田, 1996; 佐藤, 2001)。よって、自己嫌悪感を自己肯定的な感情との関連から検討することは有効で

あると考えられる。自己嫌悪感と自己肯定的な感情の関連については実証的な研究 (佐藤, 1996, 1998, 2001; 水間, 2003) がいくつか報告されている。福島 (1971) が“青年期は自己愛的時代であるが、自己愛的であるがゆえに、自己嫌悪感もまた強い”と指摘するように、特に青年期の自己嫌悪感との関連が指摘される自己肯定的な感情の一つとして、自己愛という概念が挙げられる。自己愛的な傾向は特に青年期において他の時期よりも高まる (山崎, 2008) といわれ、さらに自己愛的傾向は青年期特有の人格特徴の一つ (小塩, 1998) とも言われる。自己肯定的な感情には否定・肯定的側面があるといわれるが、自己愛的な性格として、従来の研究では誇大性、自己顕示性、他者への無関心さなど (山崎, 2008) 否定的な側面を取り扱うものが多く、自分の身体を大切にすることも自己愛の一種とみなす (佐藤, 1998) ような自己愛の「自己を受け入れ、愛する」という肯定的な側面に関して着目した研究は少ないと考えられる。自己を愛することを意味する概念として、自愛心 (self-love) ということばが挙げられる。自愛心ということばは、利他心との対比で用いられているが (津波古, 1995)、本研究では、青年期における自己肯定的な感情の否定・肯定両面を捉え、自己嫌悪感との関連を検討するために、青年期との関連が指摘される自己愛をより中立的な立場で説明すると考えられる自愛心という観点から自己肯定的感情を捉えることとする。

よって、本研究では、青年の抱く自己嫌悪感の性差及び、自愛心との関連を検討し、青年期の自己嫌悪感の様相を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者

大学生、大学院生 270 名 (男性 108 名, 女性 162 名)
平均年齢 20.04 歳

調査時期

2007 年 6 月 ~ 10 月

手続き

個別記入形式の質問紙調査で実施し、大学講義内での一斉配布と、個別配布、回収を行った。有効回答率は約 83% であった。なお、本研究は青年期の自己嫌悪感についての検討を目的とするため、40 代、30 代の被検者 (各 1 名) は分析対象としなかった。

質問紙の構成

フェイスシート

年齢、性別、所属 (所属大学及び学年) の記入を求めた。
自愛心尺度 28 項目

青年期の自愛心の傾向を測定するため、満足感、万能感、自己尊重、自己陶醉、完全主義、自己中心、自己

Table 1
自己嫌悪感要因尺度 49 項目のパターン行列 (プロマックス回転)

No.					共通性	
.不安定因子 ($\alpha = .94$) 16 項目						
36	人と話すことが苦手な自分をいやだと感じる	.95	-.04	-.07	-.08	.73
37	人との付き合い方がへたな自分をいやだと感じる	.95	-.03	-.10	.00	.76
38	人とうまく付き合えない自分をいやだと感じる	.91	.01	-.10	.01	.75
40	人と一緒にいると気づまりしてしまう自分をいやだと感じる	.90	.04	-.04	-.10	.73
39	周りの人と自分の間にカベを作ってしまう自分をいやだと感じる	.86	-.03	-.04	.00	.67
42	思ったとおりのことを言えない自分をいやだと感じる	.78	.01	.01	.01	.63
35	クラスになじめない自分をいやだと感じる	.74	.00	.03	-.02	.56
34	周りの人とうちとけることができない自分をいやだと感じる	.69	.04	.09	-.05	.57
43	自分の感情をそのまま表現できない自分をいやだと感じる	.69	-.11	.09	.03	.51
41	自分の本当の気持ちを人に伝えられない自分をいやだと感じる	.66	.06	.08	.06	.60
44	自分の気持ちに正直になれない自分をいやだと感じる	.56	-.09	.04	.16	.40
45	自分に自信が持てない自分をいやだと感じる	.49	-.01	.28	.06	.54
49	自分でも好きになれないような性格がある自分をいやだと感じる	.46	.08	.11	.09	.41
46	ものごとをすぐに決められず、迷ってしまう自分をいやだと感じる	.32	.05	.31	-.05	.32
48	自分のやりたいことが見つからない自分をいやだと感じる	.29	.13	.12	.07	.25
47	自分が本当にしたいことがよくわからない自分をいやだと感じる	.28	.11	.18	.08	.29
.理想と現実因子 ($\alpha = .94$) 14 項目						
2	自分で決めたことをやらずにいる自分をいやだと感じる	-.04	.90	-.16	-.04	.65
3	やろうと決めたことに対して努力していない自分をいやだと感じる	-.05	.86	-.13	.06	.68
4	やらなくてはならないとわかっていても頑張れない自分をいやだと感じる	.01	.85	-.09	.07	.73
6	精神がたるんでいる自分をいやだと感じる	-.04	.82	.04	.02	.69
7	自分で決めたことをやり遂げられそうにない自分をいやだと感じる	-.03	.80	.01	.07	.69
5	計画したことを実行できない自分をいやだと感じる	.01	.79	-.08	.09	.65
8	やろうとしてることに全力でむかってない自分をいやだと感じる	-.02	.78	.06	.01	.65
10	自分に甘く、すぐに妥協してしまう自分をいやだと感じる	.01	.73	.09	-.08	.54
13	安易な、楽な道を選んでしまう自分をいやだと感じる	.00	.72	.09	-.08	.52
1	なまけている自分をいやだと感じる	-.05	.71	.03	-.02	.48
9	生活がだらけている自分をいやだと感じる	.05	.68	.10	-.05	.54
14	誘惑に負けてしまいがちな自分をいやだと感じる	-.06	.65	.09	.02	.46
11	やろうとしていることがなかなか進まない自分をいやだと感じる	.13	.60	.05	-.11	.42
12	不規則な生活をしている自分をいやだと感じる	.11	.52	.03	-.09	.30
.影響過剰因子 ($\alpha = .92$) 11 項目						
28	まわりからの評価を気にしている自分をいやだと感じる	-.04	-.02	.91	.05	.81
26	人の目ばかりを気にしている自分をいやだと感じる	.04	-.02	.90	-.06	.79
25	人からどう思われているかを気にして行動している自分をいやだと感じる	.00	-.06	.87	-.02	.69
27	人からの評価を意識しすぎている自分をいやだと感じる	.03	.02	.86	.00	.80
24	周囲の目を気にする自分をいやだと感じる	-.08	.05	.85	-.05	.64
29	人のことが気になってしまう自分をいやだと感じる	.06	-.09	.84	.01	.71
30	つい人と自分を比べてしまう自分をいやだと感じる	.16	.04	.65	.04	.64
32	無理をしている自分をいやだと感じる	.13	.04	.42	.04	.32
31	自分の理想像と現実の姿との間に落差がある自分をいやだと感じる	.18	.13	.42	-.05	.36
23	強がりを言ってしまう自分をいやだと感じる	-.08	.08	.35	.35	.36
33	自分の理想の体つきとは違っている自分をいやだと感じる	.02	.13	.30	.13	.23
.配慮欠如因子 ($\alpha = .92$) 8 項目						
19	人の気持ちを考えずに言い過ぎてしまう自分をいやだと感じる	.02	-.09	-.06	.95	.79
20	言わなくていいことまで言って人を傷つけてしまう自分をいやだと感じる	.00	-.06	.01	.89	.75
18	軽はずみな言葉で人にいやな思いをさせる自分をいやだと感じる	-.02	-.03	.02	.88	.75
17	相手のことを考えずにきついことを言ってしまう自分をいやだと感じる	-.05	.00	-.03	.86	.67
21	人に不快な思いをさせてしまう自分をいやだと感じる	.10	.05	-.01	.76	.68
22	イライラする時に人にあたって迷惑をかけてしまう自分をいやだと感じる	-.07	-.11	.15	.72	.50
16	人を傷つけるようなことを言ってしまう自分をいやだと感じる	.08	.21	-.15	.70	.63
15	うそをついてしまうときの自分をいやだと感じる	.06	.20	.08	.42	.41
因子寄与 (%)		37.76	9.72	5.81	4.26	
因子間相関			.46	.66	.47	
				.49	.53	
					.47	

因子抽出法 主因子法, 小点数 3 桁以下省略

Table 2

自己嫌悪感の二次因子パターン行列(プロマックス回転)

	二次因子	二次因子	共通性
.不安定な自己に対する自己嫌悪感因子 ($\alpha = .81$)			
不安定因子	.80	.03	.68
影響過剰因子	.79	.06	.56
.理想とは違う自分に対する自己嫌悪感因子 ($\alpha = .71$)			
理想と現実因子	.04	.71	.56
配慮欠如因子	.05	.70	.55
因子寄与 (%)	55.92	6.14	
因子間相関		.75	

因子抽出法, 主因子法, 小数点3桁以下省略

擁護の7因子からなる自愛心尺度(佐藤, 2001)56項目から各因子に負荷の高い(.40以上)質問項目の上位4項目づつを用いて, 全28項目の自愛心尺度を作成した。回答は, たいていそうである, ときどきそうである, たまにはそうである, あまりそうではない, ほとんどそうではないの5件法でもとめた。

自己嫌悪感尺度21項目(水間, 1996)

青年が“全体的自己に関して, どのくらい「嫌悪する」方向の評価的感情を自ら抱いているのかを測定する”(水間, 1996)ため, 1因子からなる水間(1996)による自己嫌悪感尺度を調査材料として用いた。回答は, 非常にあてはまる, あてはまる, どちらともいえない, あてはまらない, 非常にあてはまらないの5件法でもとめた。

自己嫌悪感の要因尺度49項目

青年が自分自身のどのようなところをいやだと感じるかという要因を検討するため, 課題遂行停滞, 他者への配慮, 他者への意識過剰, 他者との親和不能, 他者への表出不能, 目標方向不定の6因子から構成される佐藤(1994)の自己嫌悪感項目を用いた。教示は「あなたはどのようなときに『自分がいやだ』とか, 『自分がきらいだ』とか感じますか?」とし, 回答は, 非常にあてはまる, あてはまる, どちらともいえない, あてはまらない, 非常にあてはまらないの5件法でもとめた。

結 果

1. 自己嫌悪感の因子分析

1-a. 自己嫌悪感の一次因子

自己嫌悪感はどのような因子で構成されているのかを検討するために, 主因子法, プロマックス回転による自己嫌悪感の要因尺度(佐藤, 1994)の因子分析を行った。その結果(Table1), 佐藤(1994)における研究では6因子解が妥当であるとされていたが, 本研究においては

Table 3

自己嫌悪感の諸側面に関する性差

	性別	度数	平均値	標準偏差	t 値
不安定因子	男性	107	44.04	13.4	2.23*
	女性	161	47.84	13.87	
理想と現実因子	男性	108	38.31	9.14	1.96†
	女性	162	40.38	7.4	
影響過剰因子	男性	107	48.63	12.13	3.06**
	女性	162	53.29	12.27	
配慮欠如因子	男性	104	30.56	7.71	0.81
	女性	162	31.33	7.43	

小数点3桁以下省略 ただし †...p<.10, *...p<.05, **...p<.01

4因子解が妥当であると考えられた。第1因子から第3因子においては, 項目内容より, 順に, 「他者および自身に対する不安定さ」因子(以下, 不安定因子と略記), 「理想とのズレと努力の停滞」因子(以下, 理想と現実因子と略記), 「他者・環境からの影響過剰」因子(以下, 影響過剰因子と略記)と名付けた。第4因子については, 佐藤(1994)の研究における「他者への配慮欠如」因子(以下, 配慮欠如因子と略記)とほぼ同内容であると考えられたため, 同様の因子名とした。

1-b. 自己嫌悪感の二次因子

自愛心と自己嫌悪感の関連を検討するために, 自己嫌悪感をさらに上位の少数の因子に集約することを意図して, 一次因子得点により主因子法, プロマックス回転を用いた二次因子分析を行った。その結果(Table2), 二次因子として, 2因子解が妥当であると考えられた。この二次因子は対他的自己嫌悪感と, 対自的自己嫌悪感で自己嫌悪感を捉えることが可能とする佐藤(1997, 2001)とは異なる結果が得られた。二次因子1から順に, 項目内容より「不安定な自己に対する自己嫌悪感」, 「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」と名付けた。

2. 自己嫌悪感の性差について

2-a. 自己嫌悪感の程度の強さに関する性差

青年期における自己嫌悪感の程度の強さに関する性差を検討するために, 性別を独立変数とし, 自己嫌悪感尺度(水間, 1996)の合計得点を従属変数とする独立したサンプルのt検定を行った。その結果($t = 1.546$ (n.s.)), 有意差はみられなかった。

2-b. 自己嫌悪感の諸側面に関する性差

自己嫌悪感の諸側面に関する性差を検討するために, 性別を独立変数とし, 自己嫌悪感要因尺度(佐藤, 2001)から得られた一次因子得点を従属変数とする独立したサンプルのt検定を行った。その際, 自己嫌悪感を抱く程度の強さに性差は認められなかった為, より詳細に自己嫌悪感の性差についての検討を行うことが妥当で

Table 4
自愛心尺度 28 項目のパターン行列 (プロマックス回転)

No.									共通性
.満足感因子 ($\alpha = .88$) 4 項目									
4	今の自分で満足だと感じる	.85	.04	-.02	-.07	-.02	.11	.01	.76
2	私は今の自分で十分だと思っている	.85	-.02	-.02	-.02	.03	.04	-.05	.74
1	自分の現状に満足している	.80	.09	.00	.03	.02	-.08	.02	.66
3	今の自分の生活に納得している	.75	-.03	.09	.01	-.09	-.04	.06	.53
.万能感因子 ($\alpha = .88$) 4 項目									
7	私が本気を出せば人よりうまくやれると信じている	-.01	.89	.01	.09	.00	-.07	.01	.76
6	自分がやれば大抵のことはうまくいくはずだと信じている	.03	.86	-.03	-.03	-.07	.03	-.02	.69
8	自分の実力はかなりの高水準にあると思っている	.07	.78	-.05	.00	.02	.04	.04	.65
5	私の秘められた可能性はかなり高いと思っている	-.03	.67	.12	-.05	.11	-.03	-.08	.55
.自己尊重因子 ($\alpha = .84$) 4 項目									
12	私らしさは捨てたくないと思っている	.01	-.10	.84	.10	.05	-.02	.01	.66
10	自分の意志や思いを大切にしようと思っている	.04	.08	.77	-.11	-.08	.10	.00	.66
11	自分の生き方にはこだわっていきたい	.00	-.02	.76	.04	-.01	.03	.06	.60
9	人とは違う自分らしさを大切にしようと思っている	.00	.09	.66	.04	.11	-.13	-.07	.49
.自己擁護因子 ($\alpha = .80$) 4 項目									
27	自分に対する批判には耳をふさぎたくなる	-.01	.03	-.06	.79	-.02	-.13	.06	.57
25	自分を傷つけるような現実からは目をそむける	.01	-.04	-.02	.74	-.06	.07	.00	.56
28	自分を傷つけるものから自分を守ろうとする	-.04	.07	.18	.73	-.11	.03	.04	.53
26	自分が不利なときはその場から逃げてしまう	-.02	-.04	.02	.67	.08	.11	-.09	.53
.自己陶醉因子 ($\alpha = .82$) 4 項目									
15	人よりもめだっていないと気がすまない	-.06	-.01	-.07	-.09	.83	.04	.05	.65
13	人から注目されているのを感じていい気持ちになる	-.02	.00	.22	-.01	.76	-.02	-.10	.62
14	人からの注目や視線を浴びているつもりで行動している	.01	.00	-.02	-.06	.76	.01	.08	.59
16	人に自分の経験を語って聞かせていい気分になる	.01	.15	-.08	.13	.49	.09	.08	.45
.自己中心因子 ($\alpha = .80$) 4 項目									
21	自分のためには他人は二の次にしてしまう	.03	-.09	.06	-.05	.03	.84	.00	.66
22	他人の意向を犠牲にしても自分の考えを押し通す	.06	-.02	.01	.05	-.01	.71	.03	.54
23	他人のことよりは自分のことを優先して考える	-.06	.12	-.03	-.04	.03	.68	-.05	.47
24	こころのどこかで自分さえ良ければいいと思っている	.01	-.03	-.10	.26	.06	.52	-.04	.46
.完全主義因子 ($\alpha = .77$) 4 項目									
19	私は自分に対してかなり高い水準をもとめている	-.04	.02	.03	-.09	-.04	.01	.86	.74
17	完璧な自分でありたいと願っている	.02	.07	-.13	.15	.08	-.06	.63	.46
20	自分に求める目標や理想はかなり高く設定している	-.14	.08	.13	-.10	-.10	.19	.62	.59
18	服装や身だしなみはいつもバッチリ決めた自分でいたい	.17	-.19	.03	.09	.18	-.14	.60	.40
因子寄与%		21.05	13.08	11.8	6.94	6.31	5.55	4.82	
因子間相関			.19	-.01	.03	.13	.08	-.20	
				.38	-.05	.39	.23	.27	
					-.07	.21	.08	.31	
						.33	.37	.19	
							.31	.36	
								.33	

因子抽出法, 主因子法, 小数点三桁以下省略

あると判断し, 一次因子得点を変数として用いた。その結果 (Table3), 不安定因子 ($t=2.23$ ($p<.05$)) と影響過剰因子 ($t=3.06$ ($p<.01$)) では, 有意差がみられ, 理

想と現実因子 ($t=1.96$ ($p<.10$)) では, 有意な傾向がみられた。配慮欠如因子 ($t=0.81$ (n.s.)) では, 有意差はみられなかった。以上のことから, 不安定因子は, 女性

のほうが有意に高いことが示され、影響過剰因子は女性のほうが有意に高いことが強く示された。理想と現実因子は、女性のほうが有意に高い傾向があることが示された。

3. 自愛心の因子分析

3-a. 自愛心の一次因子

自己嫌悪感と自己肯定的な感情である自愛心の関連を検討するため、主因子法、プロマックス回転による自愛心尺度の因子分析を行った。その結果 (Table 4)、佐藤 (2001) で得られた結果とほぼ同様の結果が得られた。第1因子から第3因子および第6因子は順に、先行研究 (佐藤, 2001) の「満足感」「万能感」「自己尊重」「自己中心」に該当すると考えられたため、同様の因子名とした。第4因子、第5因子、第7因子に関しては、先行研究 (佐藤, 2001) の第7因子、第4因子、第5因子である「自己擁護」、「自己陶醉」、「完全主義」とほぼ同内容であると考えられたため、同様の因子名とした。

3-b. 自愛心の二次因子

自愛心と自己嫌悪感の関連を検討するために、自愛心をさらに上位の少数の因子に集約することを意図して、佐藤 (1998, 2001) にならい、自愛心の一次因子分析で得られた因子得点を用いて、重みなしの最小二乗、プロマックス回転による二次因子分析を行った。その結果 (Table 5)、二次因子分析では、一次因子と同様に、佐藤 (2001) の研究とほぼ同様の見解がえられた。よって、佐藤 (2001) の研究における二次因子名を参考にし、二次因子1から順に、「自律的で未来志向的な自己肯定」、「自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定」、「自己受容的な自己肯定」と名づけた。

Table 5

自愛心の二次因子パターン行列 (プロマックス回転)

	二次因子	二次因子	二次因子	共通性
. 自律的で未来志向的な自己肯定因子 ($\alpha=.59$)				
万能感	.94	-.01	.34	.78
自己尊重	.55	-.14	-.09	.29
. 自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定因子 ($\alpha=.66$)				
自己擁護	-.35	.93	.08	.69
自己中心	.12	.57	.06	.37
自己陶醉	.37	.50	.15	.47
. 自己受容的な自己肯定因子 ($\alpha=.59$)				
完全主義	.35	.17	-.73	1.00
満足感	.20	.17	.51	.22
因子寄与 (%)	35.14	19.37	17.29	
因子間相関		.42	-.34	
			-.37	

因子抽出法、重みなしの最小二乗法、小数点三桁以下省略

4. 自愛心と自己嫌悪感について

自己嫌悪感と自己肯定的な感情である自愛心の関連を検討するため、自愛心得点及び自愛心の二次因子と自己嫌悪感、自己嫌悪感の要因との関連についての検討を行った。また、本研究では小塩 (1998) にならい、自愛心という自己肯定的な感情を青年期的人格特徴とし、自己嫌悪感をその人格特徴を持つ青年が抱く自己否定的な感情と捉えることとした。

4-a. 自愛心と自己嫌悪感の関連

まず、自愛心という自己肯定的な感情と自己嫌悪感の関連を検討するため、自愛心尺度得点の平均よりも得点が高い群 ($M=97.48, SD=9.29, N=128$) と低い群 ($M=75.31, SD=9.14, N=134$) の2群に分け、自愛心を独立変数とし、自己嫌悪感得点および、自己嫌悪感の要因の二次因子を従属変数とする独立したサンプルのt検定を行った。その結果、自己嫌悪感得点 ($t=0.92$ (n.s.)), 「不安定な自己に対する自己嫌悪感」因子 ($t=-0.14$ (n.s.)), 「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」因子 ($t=0.49$ (n.s.)) を従属変数とするいずれのt検定においても有意差はみられなかった。

4-b. 自愛心二次因子と自己嫌悪感の関連について

4-a.において、自愛心と自己嫌悪感の関連は示唆されなかった。従って、自愛心をより詳細に分類し、自己嫌悪感との関連を検討することが妥当であると考えられた。そのため、次に自愛心の二次因子と自己嫌悪感、自己嫌悪感の要因との関連を検討した。

4-b-(1). 自愛心二次因子と自己嫌悪感との関連

自愛心の二次因子である自律的で未来志向的な自己肯定、自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定、自己受容的な自己肯定を独立変数とし、自己嫌悪感得点を従属変数とするステップワイズ方式の重回帰分析を行った。その結果 (Fig.1)、有意水準5%で、自愛心の3次元すべてが選出された ($R^2=.132$)。自律的で未来志向的な自己肯定 ($\beta = -.289$ ($p<.01$)), 自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定 ($\beta = .117$ ($p<.05$)) は、自己嫌悪感と有意な正の相関がみられた。そして、自己受容的な自己肯定 ($\beta = -.208$ ($p<.01$)) は、有意な負の相関がみられた。以上の結果から、自律的で未来志向的な自己肯定が高いほど、あるいは自己受容的な自己肯定が高いほど自己嫌悪感を感じる程度は低くなることが示された。そして、自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定が高いほど自己嫌悪感を抱く程度は高くなることが示唆された。

4-b-(2). 自愛心二次因子と自己嫌悪感二次因子との関連

自愛心の二次因子と自己嫌悪感の関連が示唆されたため、さらに詳細に2者の関連を検討することを目的として、自愛心の二次因子である自律的で未来志向的な自己肯定、自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定、

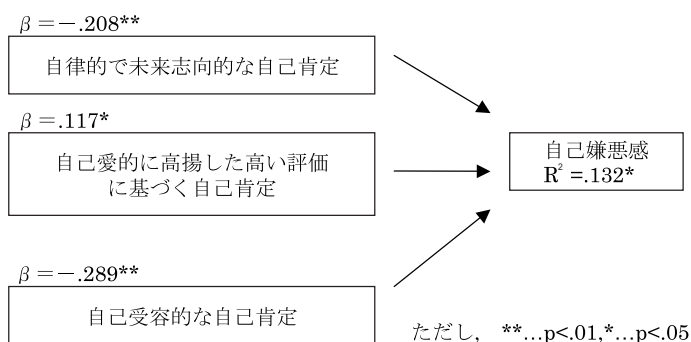


Fig.1 自己嫌悪感に対する自愛心3次元からの重回帰分析結果

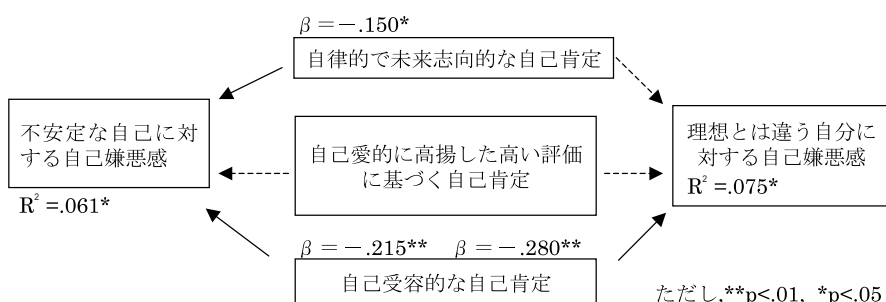


Fig.2 自己嫌悪感二次因子に対する自愛心3次元からの重回帰分析結果

自己受容的な自己肯定を独立変数とし、自己嫌悪感の二次因子である不安定な自己に対する自己嫌悪感と理想とは違う自分に対する自己嫌悪感を各々従属変数とするステップワイズ方式の重回帰分析を行った。その結果 (Fig.2), 不安定な自己に対する自己嫌悪感を従属変数とする重回帰分析では、有意水準 5% で、自律的で未来志向的な自己肯定と自己受容的な自己肯定の 2 次元でのみ選出された ($R^2 = .061$)。自律的で未来志向的な自己肯定 ($\beta = -.150$ ($p < .05$)) と、自己受容的な自己肯定 ($\beta = -.215$ ($p < .01$)) は、有意な相関がみられた。以上の結果から、自律的で未来志向的な自己肯定が高いほど、不安定な自己に対する自己嫌悪感を感じる程度は低くなることが示唆された。そして、自己受容的な自己肯定が高いほど不安定な自己に対する自己嫌悪感を感じる程度は低くなることが示された。理想とは違う自分に対する自己嫌悪感を従属変数とする重回帰分析では、有意水準 5% で、自己受容的な自己肯定の 1 次元のみが選出された ($R^2 = .075$)。自己受容的な自己肯定 ($\beta = -.280$ ($p < .01$)) では、有意な相関がみられた。つまり、自己受容的な自己肯定が高いほど、理想とは違う自分に対する自己嫌悪感とは低くなることが示された。

4-c. 自愛心の二次因子が自己嫌悪感に与える影響

4-b.において、自愛心の二次因子と自己嫌悪感、自己嫌悪感の要因の二次因子の一部には有意な相関がみられた。よって、自己肯定的な感情のどのような側面が、自己嫌悪感及び自己嫌悪感の要因のどのような側面に影響を及ぼすのかを明らかにするため、以下、自愛心の二次因子と自己嫌悪感、自己嫌悪感の要因の一次因子の関連を検討した。

4-c-(1). 自律的で未来志向的な自己肯定と自己嫌悪感

自愛心二次因子 1 の「自律的で未来志向的な自己肯定」に高い負荷 (.55 以上) を示す、「万能感」「自己尊重」因子に高い負荷 (.66 以上) を示す質問項目 (Q5-Q12) 得点から、平均よりも得点が高い群 ($M=33.05$, $SD=3.17$, $n=133$) と平均よりも得点が高い群 ($M=23.77$, $SD=3.96$, $n=135$) の 2 群に分けた。そして、「自律的で未来志向的な自己肯定」を独立変数とし、自己嫌悪感得点および、自己嫌悪感の要因の 4 因子を従属変数とする独立したサンプルの t 検定を行った。その結果 (Table6), 自己嫌悪感得点 ($t=3.15$ ($p < .01$)), 不安定因子 ($t=2.29$ ($p < .05$)), 影響過剰因子 ($t=2.44$ ($p < .05$)) を従属変数とする t 検定では、有意差がみられた。理想と現実因子 ($t=0.22$ (n.s.)), 配慮欠如因子 ($t=0.67$

Table 6
自律的で未来志向的な自己肯定と自己嫌悪感

		平均値	標準偏差	t 値
自己嫌悪感	低群	72.77	18.35	3.15**
	高群	65.23	20.67	
不安定	低群	48.15	11.9	2.29*
	高群	44.31	15.24	
理想と現実	低群	39.62	7.6	0.22
	高群	39.41	8.81	
影響過剰	低群	53.02	11.45	2.24*
	高群	49.64	13.09	
配慮欠如	低群	31.3	6.95	0.67
	高群	30.67	8.13	

小数点三桁以下省略 ただし, **... $p<.01$, *... $p<.05$

Table 7

自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定と自己嫌悪感

		平均値	標準偏差	t 値
自己嫌悪感	低群	66.55	19.83	1.88 †
	高群	71.11	19.55	
不安定	低群	45.36	13.32	0.85
	高群	46.8	14.18	
理想と現実	低群	39.39	8.16	0.18
	高群	39.58	8.34	
影響過剰	低群	49.81	12.94	1.89 †
	高群	52.68	11.71	
配慮欠如	低群	31.27	7.65	0.71
	高群	30.62	7.46	

小数点三桁以下省略 ただし, †... $p<.10$

(n.s.) を従属変数とする t 検定においては, 有意差がみられなかった。以上のことから, 自律的で未来志向的な自己肯定の高群は低群よりも, 有意に自己嫌悪感を抱く程度が弱いことが示された。また, 自己嫌悪感の要因の中でも, 自律的で未来志向的な自己肯定の高群は低群よりも, 有意に影響過剰因子および不安定因子は低いことが示唆された。

4-c-(2). 自己愛的に高揚した自己肯定と自己嫌悪感

自愛心二次因子 2 の「自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定」に高い負荷 (.50 以上) を示す, 「自己擁護」, 「自己中心」, 「自己陶醉」因子に高い負荷を示す (.49 以上) 質問項目 (Q13-Q16, Q21-Q28) 得点から, 平均よりも質問項目の得点の高い群 ($M=38.9$, $SD=5.5$, $n=132$) と, 低い群 ($M=26.5$, $SD=4.5$, $n=133$) の 2 群に分けた。そして, 「自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定」を独立変数とし, 自己嫌悪感得点および, 自己嫌悪感の要因の 4 因子を従属変数とする独立したサンプルの t 検定を行った。その結果 (Table7), 自己嫌悪感得点 ($t=1.88$ ($p<.10$)), 影響過剰因子 ($t=1.89$

Table 8
自己受容的な自己肯定と自己嫌悪感

		平均値	標準偏差	t 値
自己嫌悪感	低群	75.77	19.66	5.38**
	高群	63.3	18.21	
不安定因子	低群	48.85	14.04	2.86**
	高群	44.06	13.25	
理想と現実因子	低群	41.73	8.1	4.16**
	高群	37.67	7.85	
影響過剰因子	低群	54.72	12.71	4.16**
	高群	48.56	11.52	
配慮欠如因子	低群	33.1	7.25	4.22**
	高群	29.27	7.41	

小数点三桁以下省略 ただし, **... $p<.01$

($p<.10$)) を従属変数とする t 検定においては, 有意な傾向があるといえた。不安定因子 ($t=0.85$ (n.s.)), 理想と現実因子 ($t=0.18$ (n.s.)), 配慮欠如因子 ($t=0.71$ (n.s.)) を従属変数とする t 検定においては, 有意差はみられなかった。よって, 自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定の高群は低群よりも有意に, 自己嫌悪感を感じる程度は強く, 自己嫌悪感の要因の影響過剰因子が高い傾向があることが示された。

4-c-(3). 自己受容的な自己肯定と自己嫌悪感

自愛心二次因子 3 の「自己受容的な自己肯定」に高い負荷 (.51 以上) を示す, 「完全主義」 「満足感」因子に高い負荷 (.60 以上) を示す質問項目 (Q1-Q4, Q17-Q20) 得点から, 平均よりも得点が高い群 ($M=24.70$, $SD=3.41$, $n=144$) と低い群 ($M=15.60$, $SD=3.48$, $n=124$) の 2 群に分けた。その際, 「完全主義」得点は反転項目とした。そして, 「自己受容的な自己肯定」を独立変数とし, 自己嫌悪感得点および, 自己嫌悪感の要因因子を従属変数とする独立したサンプルの t 検定を行った。その結果 (Table8), 自己嫌悪感得点 ($t=5.38$ ($p<.01$)), 不安定因子 ($t=2.86$ ($p<.01$)), 理想と現実因子 ($t=4.16$ ($p<.01$)), 影響過剰因子 ($t=4.16$ ($p<.01$)), 配慮欠如因子 ($t=4.22$ ($p<.01$)) を従属変数とする t 検定において, 有意差がみられた。以上のことから, 自己受容的な自己肯定が高い群は低い群よりも有意に, どのような自己嫌悪感であるのかに関わりなく, 自己嫌悪感を感じる程度が低いことが強く示された。

考 察

1. 青年の抱く自己嫌悪感の様相について

佐藤 (1997) によれば, 自己嫌悪感とは者を見て, 他者とのかわりのなかで感じる対他的自己嫌悪感と, 自己をみて, 自己が試されるなかで感じる対自的自己嫌悪感が存在する。従って, 自己嫌悪感是对他的自己嫌悪感

と、対自的自己嫌悪感の二次元でとらえることが可能であると想定されたが、本研究では「不安定な自己に対する自己嫌悪感」と「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」の二次元で捉えることが可能であると考えられた。佐藤（1994）によると、青年期の自己嫌悪感の発達的变化を遂げる。中学生は、自分に対する嫌悪という1要因で自己嫌悪感を抱き、高校生になると、「人との関係の持ち方への不満と自己のあり方についての失望」という2要因、すなわち佐藤（1997）の示す2次元での自己嫌悪感を抱くこととなる。しかし、大学生では、その2要因の対人的要因と対自的要因が一部組み換えられ、さらに要因が明確化し、「自分の中味がまだできていないという自信の欠如から生じる自己嫌悪感」と、「自分の行為を統制できない自己統制の甘さから生じる自己嫌悪感」そして「自分がわからないという自己理解の不足から生じる自己嫌悪感」を抱くとされる。佐藤（1994）は、自分の将来が視界に入り始めてから抱く自己嫌悪感があるとするが、本研究では調査対象者が大学生、大学院生に限られていた。そのため、佐藤（1994）の指摘にあるように、自分の将来を模索し始めた大学生、大学院生が自分自身の理想や目標が定まらず、環境から影響される自分自身に感じる「不安定な自己に対する自己嫌悪感」と、自分自身の理想や目標はあるけれども、その目標を達成できず、成長していないと考える中で感じる「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」を抱くと考えることができた。よって、本研究では青年期、特に大学生においては、他者と関わるか否かを軸として自己嫌悪感を捉えるよりも、自分の理想や目標が明確となっていることを軸として、自己嫌悪感を捉えることが適当であるように思われた。

2. 自己嫌悪感の性差

まず、自己嫌悪感を抱く程度について、先行研究（水間、1996；佐藤、1997、1999）より、自己嫌悪感には性差があり、女性のほうが男性よりも自己嫌悪感を感じる程度が強いと想定されたが、本研究においては、自己嫌悪感を抱く程度の強さに性差はみられなかった。そのため、自己嫌悪感の抱く程度について、女性の方が男性よりも自己嫌悪感を強く抱くということに関して一概にそうであるとは言えなかった。次に、自己嫌悪感の一次因子として考えることができる4因子中、3因子に有意差あるいは有意傾向がみられ、性差があるものはすべて、女性のほうが男性よりも自己嫌悪感を有意に強く感じるという結果となった。

「他者・環境からの影響過剰」因子では、最も顕著な性差がみられた。この因子は、他者の評価を気にしすぎてしまい、環境に影響されてしまう自分に対する自己嫌悪感であると考えられるが、これは大学生では、女性は

男性よりも自己評価が低く（山田、1981）なり、また女性の自己認知には「対人的な側面や社会的属性などの外面的な側面が重要」（山本ら、1982）という示唆を支持する結果となった。次に、「他者および自身に対する不安定さ」因子に有意な性差がみられた。この因子は、他者との付き合いの中で、自分に自信がなく、目標が定まらない不安定な自己に対する自己嫌悪感と考えられ、佐藤（1997）の「自己主張の欠如」、「目標方向不定」、「他者との親和不能」因子がそれを説明すると考えられた。しかし、佐藤（1997）では、これらの因子に性差はみられず、本研究とは異なる結果が得られた。そして、「理想とのズレと努力の停滞」因子にも女性の方が男性より有意に強い傾向があるという結果が得られた。山本ら（1982）は、男女が自己に期待する理想像に各々性役割観が大きく影響するという。また、男性の場合は知的能力への高い評価は自己の持つ性役割期待と矛盾を起さずに自己評価を高めるが、女性の場合は伝統的性役割と葛藤を起こす場合もあるという。この因子は、自分が設定した目標や理想と、現実の自己が異なっていたり、努力を怠っていることに対する自己嫌悪感であると考えられるが、男性よりも女性のほうが伝統的性役割期待があるすれば、理想を抱くにあたり、葛藤を起こしやすく、それによって動機付けが下がり、停滞していることに対する自己嫌悪感を示すと捉えることはできないであろうか。

本研究では、女性は様々な側面で男性よりも自己嫌悪感の要因を強く抱くことが示された。また、自己嫌悪感の要因の性差を検討するにあたり、社会的・文化的背景が重要な位置を示すと考えられた。よって、今度、それらの視点を含めた更なる検討が必要であろう。

3. 自愛心と自己嫌悪感

佐藤（2001）は、自己否定的な感情と自己肯定的な感情が交互に連動し、互いに影響しあうとし、自尊心と自愛心の質問項目から、「自愛的に高揚した高い評価や期待に基づく自己肯定（私はすばらしい）」、「自律的な生き方への敬意と自負に基づく自己肯定（私は私らしく生きている）」、「自己受容的な納得や満足に基づく自己肯定（私はこれでよい）」という3つの二次因子を抽出した。そしてそのなかでも、自己愛的に高揚した自己肯定の存在は自己嫌悪感をより多く感じさせ、受容的な自己肯定は自己嫌悪感を感じることを少なくさせていることを示した。また、生き方への自負に基づいて自己を肯定する自尊的な自己肯定の場合は対他的な自己嫌悪感を感じることをより少なくさせる場合があることを示している。そのため、本研究においても、自己肯定的感情である自愛心と自己嫌悪感、自己嫌悪感の要因との関連を検討した。

まず、自愛心の二次因子を独立変数とし、自己嫌悪感得点を従属変数とする重回帰分析の結果から、「自律的で未来志向的な自己肯定」は自己嫌悪感を感じる程度を弱くさせ、「自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定」は自己嫌悪感を感じる程度を強くさせ、「自己受容的な自己肯定」は自己嫌悪感を感じる程度を弱くさせることが示唆された。これは、佐藤 (2001) の、受容的な自己肯定ができていない場合は自己嫌悪感を感じるが多くなり、自己愛的に自身を高く評価し、高水準の期待や理想を自分に寄せている場合には、自己嫌悪感をより多く感じるという結果と一致すると考えられる。

また、自愛心と自己嫌悪感の二次因子である「不安定な自己に対する自己嫌悪感」および、「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」についての関連を検討した。その結果、自己嫌悪感の要因について考えると、「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」よりも、自分自身の理想や目標が定まらず、環境から影響される自分自身に感じる「不安定な自己に対する自己嫌悪感」のほうが、自己嫌悪感の程度についての結果と構造が近かった。そのため、不安定な自己に対する自己嫌悪感のほうが、自己嫌悪感という感情の中で占められる割合が多いのではないかと考えられる。つまり、本研究においては青年、特に大学生、大学院生の抱く自己嫌悪感は、理想を追求するあまりに、現実との違いによって生じるというよりも、理想や目標を模索する中で、環境から影響を受けすぎてしまうことによって生じるものが大きいと考えられた。

さらに、自己肯定的な感情のどのような側面が、自己嫌悪感のどのような側面に影響を及ぼすのかを明らかにするため、自愛心の二次因子と自己嫌悪感、自己嫌悪感の要因の関連を検討した。その結果、自律的で未来志向的な自己肯定が高いほど、自己嫌悪感を抱く程度が弱いことが示された。自己嫌悪感のなかでも、自律的で未来志向的な自己肯定が高いほど、他者・環境からの影響過剰であることについての自己嫌悪感は低いことが示唆され、これは、佐藤 (2001) の、生き方への自負に基づいて自己を肯定する自尊的な自己肯定が高い場合は対他的な自己嫌悪感をより少なく感じさせるという結果とほぼ一致したと考えられる。そして、自律的で未来志向的な自己肯定が高いほど、他者および自身に対する不安定さについての自己嫌悪感は低い傾向があるといえた。また、自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定が高いほど、自己嫌悪感を感じる程度は強い傾向があることが示されたが、自己嫌悪感の要因として考えられる「他者および自身に対する不安定さ」、「理想とのズレと努力の停滞」、「他者への配慮欠如」には関連がないことが示された。そして、自己受容的な自己肯定が高いほど、自己嫌悪感を感じることを少なくさせることが示された。これ

らの結果から、以下のことがいえる。

自律的で未来志向的な自己肯定を抱く人は、第一に自分が何らかの失敗や、間違いを犯してしまっても、積極的にプラスに変えてゆこうとするため、自己嫌悪感という形でその失敗や間違いを捉えないのではないかと思われる。第二に、自分の目標や理想を持ち、それに向かってまい進しているため、他者や環境からの影響を過剰に受けることが少なくなり、それに関する自己嫌悪感を抱きにくいと思われる。第三に、自己を尊重し、自分の行うことに関して、自信を持っているために、他者に関することで自己嫌悪感を感じたり、目標や理想がないことについて自己嫌悪感を抱いたりすることが少ないのではないかと思われる。また、自己愛的に高揚した高い評価に基づいて自己を肯定する人は、自分の理想を持ち、主観的にそれを維持できているときは自己嫌悪感に陥らない。しかし、一度自分を客観視しはじめると今まで見ずに過ごしてきた自分の限界に直面し、他者からの評価が気になったり、自分のあるべきはずの姿とは違う現在の自分により一層強い自己嫌悪感を抱く。自己愛的に高揚した高い評価に基づいて自己を肯定する人の中には、このように二者が混在しているために、分析結果は傾向を見受けられるだけに留まったという可能性が考えられる。そのため、今後、自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定は何を背景とするものなのか、現在の自分と理想の自分をどのように捉えているのかという視点をふまえて、検討していくことが必要となるだろう。そして、受容的に自己を肯定する人は、自分が何らかの失敗や、間違いを犯してしまっても、そのような自分を受け入れることが可能であるため、自己嫌悪感を抱く程度が弱いと考えられる。

4. まとめ

本研究では、青年期の自己嫌悪感様相を捉えるために、性差と自己肯定的感情である自愛心という観点より、検討を行った。その結果、青年の抱く自己嫌悪感は自分自身の理想や目標が定まらず、環境から影響される自分自身に感じる「不安定な自己に対する自己嫌悪感」と、自分自身の理想や目標はあるけれども、その目標を達成できず、成長していないなかで感じる「理想とは違う自分に対する自己嫌悪感」の二次元で捉えることが可能であると考えられた。また、女性は男性よりも自己嫌悪感を様々な側面で感じることが示された。そして、「自律的で未来志向的な自己肯定」は自己嫌悪感を感じる程度を少なくさせ、「自己愛的に高揚した高い評価に基づく自己肯定」は自己嫌悪感を感じる程度を多くさせ、「自己受容的な自己肯定」は自己嫌悪感を感じる程度を少なくさせることが示唆された。これらの結果は、青年期の自己嫌悪感の様相を把握し、青年の自己形成を支えるにあ

たり、重要な知見となるであろう。

5. 今後の課題

最後に、本研究においては青年期の自己嫌悪感の様相を検討するにあたり、調査対象者を大学生、大学院生に限定した。しかし、より厳密に青年期の自己嫌悪感の様相を把握するためには、調査対象者をより広域に設定する必要があると考えられる。また、自己肯定的感情を自愛心と限定して検討を行った。しかし、自己肯定的感情は自愛心を包括する、より広義の概念であると考えられ、自己肯定的感情という観点から自己嫌悪感を捉えるためには、さらなる検討が必要であると考えられた。

謝 辞

本稿は、平成19年度聖心女子大学文学部卒業論文の一部を加筆、修正したものである。本論文を作成するにあたりご指導頂き、投稿を快諾して下さいました聖心女子大学教授 鈴木乙史先生、お忙しい中丁寧なご指導を賜りました九州大学人間環境学府研究院教授 田嶋誠一先生、本稿の校閲や貴重なご助言を下さいました同教授の福留留美先生に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 福島修美 (1971) : 感情の発達 佐藤正 (編著) 青年心理学 多摩書房 pp105-128.
- 水間玲子 (1996) : 自己嫌悪感尺度の作成 教育心理学研究, 44, 269-302.
- 水間玲子 (2003) : 自己嫌悪感と自己形成の関係について 自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向に注目して 教育心理学研究, 51, 43-53.
- 落合良行 (1985) : 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学研究 33, 70-75.
- 荻野恒一 (1978) : 自己嫌悪のすすめ 青年心理, 9, 418-426.
- 小塩真司 (1998) : 青年期の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 佐藤文字・田中弘子 (1989) : 死と自殺に対する態度についての心理学的研究-Purpose-in-life-test (PIL) を手がかりに Artes Liberales (岩手大学人文社会科学部紀要), 44, 59-77.
- 佐藤有耕 (1994) : 青年期における自己嫌悪感の発達の变化 教育心理学研究, 42, 253-260.
- 佐藤有耕 (1996) : 自尊心との関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴 神戸大学発達科学部研究紀要, 4 (1), 1-12.
- 佐藤有耕 (1997) : 2次元でとらえた青年期の自己嫌悪感の発達過程 青年心理学研究, 9, 1-18.
- 佐藤有耕 (1998) : 自愛心との関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴 神戸大学発達科学部研究紀要, 6 (1), 37-50.
- 佐藤有耕 (1999) : 青年期における自己嫌悪感の感情状態の発達の变化 青年心理学研究, 11, 1-18.
- 佐藤有耕 (2001) : 大学生の自己嫌悪感を高める自己肯定のあり方 教育心理学研究, 49, 347-358
- 佐藤有耕・落合良行 (1995) : 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴 筑波大学心理学研究, 17, 61-66
- 塩山二郎 (1979) : 断酒会活動 村山正治・上里一郎 (編著) 講座心理療法 8 セルフ・ヘルプ・カウンセリング 福村出版 pp.64-86.
- 返田 健 (1996) : 青年 (成人) についての心理学的研究の動向と問題点 教育心理学年報, 35, 58-67.
- Spranger, E. (1924) : *Psychologie des Jugendalters* Leipzig: Quelle & Meyer 土井竹治 (訳) (1973) : 青年の心理 五月書房 pp.39-64.
- Stratton, P., Hayes, N. (1993) : A student's dictionary of psychology. 2nd ed. London, New York: Arnold 依田 明・福田幸男 (訳) (1996) : 人間理解のための心理学辞典 ブレーン出版 pp.102.
- 鈴木乙史 (1998) : 性格の形成 青年期を中心に 性格形成と変化の心理学 ブレーン出版 pp105-128.
- 詫摩武俊 (1978) : 青年期における性格の発達 青年の心理 培風館 pp.65-82.
- 津波古充文 (1995) : 自愛心と利他心 J.パルフォアの道徳論 大阪産業大学論集社会科学編, 100, 45-50
- 宇野 一 (1978) : 高校生の自殺 青年心理 7, 78-86.
- 山田ゆかり (1981) : 青年期における自己概念 () 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 422-443.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) : 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山崎俊輔 (2008) : 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究, 9, 143-151.